

総務省が提供する偽・誤情報に関する啓発教育教材
「インターネットとの向き合い方 ニセ・誤情報に騙されないために」について

愛媛県立宇和島南中等教育学校
谷脇 翔

1 はじめに

近年、「フェイクニュース」が世界中で大きな社会問題となっている。日本においてはスマートフォンの普及に伴い、情報をいつでもどこでも様々な情報を手軽に多く入手することが可能になり、また、SNS等を利用した情報発信も容易になっているため、ネット上では情報過多の状態になっている。しかし、溢れかえっている情報の中には意図的・意識的に作られた嘘もあれば、悪気はないにせよ勘違いや誤解などといったものも当然あるため、それらを正しく判断した上で情報を収集していくことが求められる。世界に目を向けてみると、ウクライナとロシアの戦争状態が残念ながら現在も続いているが、侵攻の初期段階でウクライナのゼレンスキー大統領が戦場で戦うウクライナ軍に対して投降を呼びかける動画がSNS上にアップされ、それが後に、もとの顔画像を加工し、これまでの音声データを合成した合成音声によるフェイク動画であったことがわかり、世界中が騒然とした。デジタル技術の進化と情報が行き交うスピードが加速し、目の前にある情報が本物かどうかさえ危ぶまれるという時代であると感じる。情報過多の現代を生きる中高生に対して、偽・誤情報への対応力を身に付けさせられるような教材を探していたところ、総務省が提供している啓発教育教材があることを知った。私たちが知らないだけで世の中には用途や対象校種・学年に応じて様々な教材が提供されていることを知ってもらいたいと思い、今年度はこの教材に関する研究に取り組み、授業を実践することで研究をまとめることとした。

2 扱う教材についての概要

本教材は令和3年度に総務省が実施した「メディア情報リテラシー向上施策の現状と課題等に対する調査」の結果を踏まえて作成した視聴覚型の啓発教育教材である。関連する資料等はすべて総務省のHPに掲載されており、ある程度自由に使用することができる。

(1) 内容の方向性

EUにおいて幅広い年齢層のメディアリテラシーの向上を図るプログラム「GET YOUR FACTS STRAIGHT!」と、同じくEUで短時間でのフェイクニュースに関するリテラシー教育プログラムを想定している「Spot and Fight Disinformation」を参照している。また、わが国ならではの事情や事例がある。そのため、用いる事例は想定される国内受講生のなじみ深いものとし、これまでのフェイクニュースに関する各種国内調査、啓発コンテンツ、教材を適宜参考にしてオリジナルのものを作成している。内容は、有識者検討会での意見を効果的に反映している。

(2) 対象

若年層～成人世代まで幅広く対象とできる内容となっており、具体的には「高校生以上」を対象としている。

(3) 講座時間

長時間のプログラムは普及しにくいことや、海外でも受講を途中で断念している受講生が多く出ていることから、検証テストを除いた講座単体の時間を1時間以内に収まるように設

計している。また、テストを含めても、大学の講義時間（90 分）程度に収まるものを作成されている。

(4) 学習目標

「GET YOUR FACTS STRAIGHT!」の 10 個の学習目標をアレンジした、【学習目標】の 10 個の目標を満たすような内容となっている。

【学習目標】

目標 番号	内容
1	ニセ・誤情報の特徴を理解する。
2	誤解を招くような情報の種類を理解する。
3	自分が騙されることもあることと、騙される理由を理解する。
4	自分を欺く目的でニセ情報が発信される理由（動機）を理解する。
5	誤った情報を信じたり共有したりすることが、社会や自分にとってどのような影響を及ぼすかを理解する。
6	アルゴリズムが、インターネット上で見るものにどのような影響を与えるか理解する。
7	信頼できる情報源にはどのようなものがあるか知る。
8	情報を確認する方法を知る。
9	情報との適切な接し方を知る。
10	事実と意見の区別の重要性と、世の中には多様な意見があることを理解する。

(5) デザイン

今後教育機関や関係団体、事業者等が活用することを視野に入れ、分かりやすいデザインとなっている。

(6) 形式

新型コロナウイルスの影響や実施のしやすさを鑑みてオンラインで実施可能な内容となっている。

(7) 作成する教材の種類

教育に用いるスライド資料と、教師向けのマニュアルがあり、スライド資料はどのレベルの受講者でもわかる表現とし、編集が容易な ppt 形式と pdf 形式の 2 種類が用意されている。教師向けマニュアルでは、各スライドで話す内容を詳細に記載し、読めば講座が実施できるようになっている。

3 本研究の対象者

本研究は 5 年生（高校 2 年生）の 2 講座 44 名（理系Ⅰ型 28 名、文系Ⅱ型 16 名）を対象に実施する。

4 効果検証テスト（授業実施前）の実施

本教材を用いて授業を実施する前に、現時点における偽・誤情報についてどの程度理解できているかを把握するために、本教材を用いた授業を実施することを生徒たちに伝えず、「情報に関するアンケート」と称して Forms を活用して効果検証テストを実施した。このテストでは 10 個の設問が用意されており、正しいものをすべて選ぶという選択肢形式のものである。また、各設問の内容は上記で述べた【学習目標】に対応した内容となっている。なお、このテストは

本教材に付属しているものである。

(1) 設問内容（※設問番号と学習目標の目標番号が対応している）

設問 番号	問い：次のうち、正しいものをすべて選んでください。（正解はゴシック体）
1	●意図をもって作られたウソのみが、ニセ・誤情報と呼ばれる ●真実・事実より、ニセ・誤情報の方が拡散しやすい ●面白くない情報、興味をひかない情報をニセ・誤情報と呼ぶ ●善意から拡散されるニセ・誤情報も存在する ●この中に正しいものはない
2	●一部でも事実を含んでいる情報なら、内容に誤りがあってもニセ・誤情報とは呼ばない ●企業が発信する情報は、信頼性が高いので信用できる ●誰が作ったグラフでも、同じデータであれば同じ印象のものとなる ●根拠となるデータは正しいが、それを意図的に曲解して作られたニセ・誤情報が存在する ●この中に正しいものはない
3	●望ましい・信じたいと思う情報には、より騙されやすい ●冷静で注意深い人でも、ニセ・誤情報に騙されることがある ●同じ事実を目撃した人たちは、みな同じ感想を述べる ●ニセ・誤情報には意外性の高いものや、その人の正義感に訴えるものが多く、拡散されやすい ●この中に正しいものはない
4	●個人や企業の利益のため、ニセ・誤情報が流されることがある ●正しい情報なら、そこに悪意が込められていることはない ●クチコミは個人による情報発信なので信頼できる ●ニセ・誤情報では、損をする人や得をする人がいる ●この中に正しいものはない
5	●ニセ・誤情報によって、治安の悪化や暴動が引き起こされることがある ●悪意がなくても、誤情報の拡散で訴えられることがある ●人命にかかわるニセ・誤情報が存在する ●ニセ・誤情報が経済に影響を与えることがある ●この中に正しいものはない
6	●SNSへの投稿内容を見れば、世間の動きや意見を客観視できる ●ネットのアルゴリズムは、ニセ・誤情報と関連している ●ネットのニュースは、人によって異なる記事が表示される ●多くのSNSでは、自分好みの投稿が優先的に表示されるようになっている ●この中に正しいものはない

7	●拡散した情報は、多くの人に検証されているので安心できる ●感染症に関する厚生労働省のウェブ情報は、家族や友人からの情報より信頼性が高い ●「急いで知らせたい」と感じさせる情報には特に注意が必要だ ●メッセージアプリで知人が「専門家から聞いた情報」として送信してきた情報は信頼性が高い ●この中に正しいものはない
8	●画像が添付されている情報は、より信頼性が高い ●情報を信用する前に、それを否定する他の情報がないか確認するべきだ ●人命にかかわる情報なら、速やかに拡散させるべきだ ●混乱を避けるため、情報源はなるべく1つに限定する ●この中に正しいものはない
9	●不確かな情報は、世間に拡散させて追加情報を募ると効率的だ ●情報は鵜呑みにせず、「間違いかも」と考えることが重要だ ●単なる拡散・リツイートにも、情報発信の責任が伴う ●専門家であっても、過去の発言に問題がなかったか確認すべきだ ●この中に正しいものはない
10	●互いの意見が異なる場合は、どちらかの意見が誤っている ●異なる意見はできるだけ一本化して、社会を効率化すべきだ ●どのような情報・ニュースでも、意見と事実は分けて考えるべきだ ●間違いだと思う意見に対しては、強く批判して取り消させるべきだ ●この中に正しいものはない

(2) 各設問の正答率と全体の平均点

本研究の対象者 44 名全員から回答を得ることができた。各設問に対する答えとして適切なものをすべて選ぶことができているものを「正答」とし、設問ごとの正答率を算出した。また、設問 1 つに対して 10 点を与え、10 問で 100 点満点として採点し、対象者 44 名の平均点も算出した。正答率と平均点は以下のとおりである。

設問番号	正答率	設問番号	正答率
1	47.7%	6	20.5%
2	50.0%	7	68.2%
3	63.6%	8	59.1%
4	63.6%	9	68.2%
5	90.9%	10	72.7%
平均点		60.5	

(3) 各設問における正解である回答を選んでいる割合

設問ごとに、正答ではないがどの程度正解を選ぶことができているかを見てみると次のとおりになった。

設問番号	正解である回答を選んでいる割合
1	①「善意から拡散されるニセ・誤情報も存在する」…86.4% ②「真実・事実より、ニセ・誤情報の方が拡散しやすい」…61.4%

2	上記の正答率と同じ
3	①「冷静で注意深い人でも、ニセ・誤情報に騙されることがある」…97.7% ②「望ましい・信じたいと思う情報には、より騙されやすい」…86.6% ③「ニセ・誤情報には意外性の高いものや、その人の正義感に訴えるものが多く、拡散されやすい」…72.7%
4	①「ニセ・誤情報では、損をする人や得をする人がいる」…86.4% ②「個人や企業の利益のため、ニセ・誤情報が流されることがある」…84.1%
5	①「ニセ・誤情報によって、治安の悪化や暴動が引き起こされることがある」…97.7% ②「ニセ・誤情報が経済に影響を与えることがある」…97.7% ③「悪意がなくても、誤情報の拡散で訴えられることがある」…93.2% ④「人命にかかわるニセ・誤情報が存在する」…90.9%
6	①「多くのSNSでは、自分好みの投稿が優先的に表示されるようになっている」…95.5% ②「ネットのニュースは、人によって異なる記事が表示される」…77.3% ③「ネットのアルゴリズムは、ニセ・誤情報と関連している」…36.4% 低
7	①「感染症に関する厚生労働省のウェブ情報は、家族や友人からの情報より信頼性が高い」…90.9% ②「急いで知らせたいと感じさせる情報には特に注意が必要だ」…77.3%
8	上記の正答率と同じ
9	①「単なる拡散・リツイートにも、情報発信の責任が伴う」…95.5% ②「情報は鵜呑みにせず、間違いかもと考えることが重要だ」…88.6% ③「専門家であっても、過去の発言に問題がなかったか確認すべきだ」…79.5%
10	上記の正答率と同じ

各設問の正答率と上記の表から、学習目標6「アルゴリズムが、インターネット上で見るものにどのような影響を与えるか理解する。」に関して理解が不十分であることがわかる。回答状況を見ても、不正解の回答である「SNSへの投稿内容を見れば、世間の動きや意見を客観視できる」を29.5%の生徒が回答していた。SNSを多用する中高生にとっては、SNSを通して得られる情報というものが「情報のすべて」と言えば言い過ぎかもしれないが、手軽に情報を収集や発信できるSNSにかなり影響を受けている印象を持った。また、学習目標2「誤解を招くような情報の種類を理解する。」に関しては、正答率が50.0%と高くない結果となった。不正解の回答である「企業が発信する情報は、信頼性が高いので信用できる」を34.1%の生徒が回答しており、企業であれば発信する情報に誤りはないだろうというように理解しているのではないかと推測される。

5 授業の実施

効果検証テスト（授業実施前）の結果を踏まえて2講座に対して授業を実施した。授業で使用するスライドは総務省から提供されているppt形式のものをそのまま使用し、授業時間である50分で行った。ワークシートは用意されていなかったため、スライドの内容に合わせて独自に空欄補充形式のワークシートを作成した。生徒たちには授業を実施した日のうちに、Formsで2種類の振り返りを行うように指示した。振り返り①では、授業前後での理解度の変化を見ることを目的として、授業実施前に行った効果検証テストと同じものを再度行ってもらった。ま

た、振り返り②では、生徒たちの意識や考えの変化を捉え、授業に対する評価を通して改善に活かせる知見を得ることを目的として、生徒自身の意識に関すること、授業評価と改善に関すること、授業を通じた感想や学びについて入力してもらった。

6 振り返り①について

効果検証テスト（授業実施後）を実施し、正答率と平均点を算出した。授業実施前の結果と並べて示したものが以下の表である。

(1) 回答結果

設問番号	授業前	授業後	差(%)	設問番号	授業前	授業後	差(%)
1	47.7%	65.9%	+18.2	6	20.5%	52.3%	+31.8
2	50.0%	79.5%	+29.5	7	68.2%	62.8%	−5.4
3	63.6%	93.2%	+29.6	8	59.1%	81.8%	+22.7
4	63.6%	77.3%	+13.7	9	68.2%	84.1%	+15.9
5	90.9%	86.4%	−4.5	10	72.7%	88.6%	+15.9
				授業前		授業後	差(点)
				平均点		60.5	77.0 +16.5

設問内容は学習目標に対応しており、正答率や平均点を授業実施前後で比較してみても、多くの生徒が授業実施前より実施後の方がさらに内容を理解することができているのではないかと考えられる。また、授業実施前に課題であった設問2と設問6の内容に対する理解度は、大幅に増加した。一方で、設問5と7については授業実施後の方が正答率が低くなった。

(2) 正答率が低かった2つの設問について

それぞれの設問に対する各回答を授業実施前後で回答率を比較した。

① 設問5について

○ニセ・誤情報によって、治安の悪化や暴動が引き起こされることがある	−4.5%
○悪意がなくても、誤情報の拡散で訴えられることがある	±0.0%
○人命にかかわるニセ・誤情報が存在する	+2.3%
○ニセ・誤情報が経済に影響を与えることがある	−4.5%
×この中に正しいものはない	+2.3%

② 設問7について

×拡散した情報は、多くの人に検証されているので安心できる	±0.0%
○感染症に関する厚生労働省のウェブ情報は、家族や友人からの情報より信頼性が高い	−25.0%
○「急いで知らせたい」と感じさせる情報には特に注意が必要だ	+11.4%
×メッセージアプリで知人が「専門家から聞いた情報」として送信してきた情報は信頼性が高い	−9.1%
×この中に正しいものはない	−4.5%

設問5については回答率の変動が小さく、原因の特定が難しいが、設問7については、「感染症に関する厚生労働省のウェブ情報は、家族や友人からの情報より信頼性が高い」という回答率が25.0%減少していたことが正答率の減少につながったと考えられる。某県警のSNS公式アカウントに「新型コロナの誤ったセルフチェック」が投稿され、世界で広まった誤情報としてWHOも注意喚起を行ったという内容をスライドに即して紹介したが、その内容に対して異なる捉え方をしたために、正しい回答であるにも関わらず、慎重になりすぎて選

ばなかったのではないかと思います。

7 振り返り②について

(1) 生徒自身の意識に関すること

1つ目の質問として「授業を受けてみて意識がどのようになったか」を聞き、その回答結果を以下にまとめた。

以下の質問に対する答えとして最も近いものを1つ選んでください。	当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
①過去に自分が誤った情報を信じていたかもしれない	70.5%	22.7%	6.8%	0.0%
②過去に自分が誤った情報を発信していたかもしれない	18.2%	29.5%	38.6%	13.6%
③今後は情報に対して「これはニセ・誤情報なのでは」と注意ができそうだと感じた	70.5%	29.5%	0.0%	0.0%
④ニセ・誤情報を判別する能力を伸ばしたいと感じた	88.6%	11.4%	0.0%	0.0%
⑤本日の授業で得た知識を、誰かに伝えたいと感じた	47.7%	50.0%	2.3%	0.0%

②の質問を除く質問においては、「当てはまる」・「やや当てはまる」というポジティブな回答が90%を超えており、③・④については100%という高い結果を得ることができた。授業を通して、自分が得た情報が誤っていたことに気付いたり、情報に対する注意力を身に付けたり、自分自身の今後に生かすことはもちろん、他者にも授業で得た知識を伝えていきたいという姿勢を身に付けられたのではないかと感じる。②については「当てはまる」・「やや当てはまる」と回答した割合の合計が47.7%、「あまり当てはまらない」・「当てはまらない」と回答した割合の合計が52.2%であった。結果が半々に分かれるという形になったが、これからの様々な場面で誤った情報を発信しない、発信したかもしれないということがないようにできることを願いたいと思う。

(2) 授業評価と改善に関すること

授業評価に関して質問を行い、評価をしてもらった結果が以下のとおりである。

	良かった	やや良かった	あまり良くなかった	良くなかった
①授業の内容	81.8%	18.2%	0.0%	0.0%
②授業のスライド	56.8%	40.9%	2.3%	0.0%
③授業のワークシート	34.1%	59.1%	6.8%	0.0%
④授業の総合評価	68.2%	31.8%	0.0%	0.0%

上記の4つの質問に対する回答では90%以上がポジティブな評価となっており、総合評価においてはポジティブな評価が100%であった。一方で、ワークシートについてはあまり良くなかったと回答している生徒がいた。感想の中に「プリントの穴埋めがどう当てはまるのか難しかった」、「プリントの空欄に当てはまる言葉が分からなかった」、「プリントの書く分量が多かった」などのワークシートに関する記述が一部見られたので、改善していき

い。授業評価では「授業時間」についても質問していたが、「長い」と回答したのは15.9%、「ちょうどよい」と回答したのは79.5%、「短い」と回答したのは4.5%であった。もともとは60分を想定して作成された本教材を50分の授業で行うということもあって、ゆっくりとしたペースで授業をすることは難しかったので、「短い」という回答が多くなるのではないかと予測していた。しかし、「長い」と回答した割合の方が「短い」と回答した割合よりも高くなり、予想外であった。意外にも「ちょうどよい」と回答した割合が約8割もいたので、今回のようにテンポよく進めていく方がいいということがわかった。

(3) 授業を通した感想や学び

最後の質問として、授業を受けてみての感想を具体的に多く入力してもらった。印象に残った感想を紹介する。(授業評価や改善に関するものは除く。また、生徒が入力した原文のまま掲載する。)

- SNS を見ているとき、疑問に思う情報に触れることもたまにあるのできちんと事実確認をしたり、不思議に思う点があれば、むやみに人に話さないようにしよう
- 出てきた情報を鵜呑みにするのではなく、少し踏みとどまって確認したい。
- 自分は良かれと思ってネットの情報を友達に送ったりしても、それが本当に友達のためになるのか考えてから送るようにしたい。
- 情報社会だからこそ、膨大な情報を自分自身で見極めて判断できるように、より注意していきたい。
- 自分がニセ・誤情報だと気づけないのは無意識に信じたいものを選んでいる、という野球の例でのお話を聞き、なるほどな、確かに自分もテニスの試合のときによくあるな、と思いました。信じたい気持ちが大きくなって間違った情報をほかの人に伝えてしまうと自分だけでなく相手にも迷惑をかけてしまうので、これからは自分の願望を判断する際に入れ込まないようにしていきたいです。
- 自分の Twitter をこの前始めたばかりなのですが、もうすでにおすすめで上がってくる情報が自分の興味がある分野だけになってきたので、一緒に上がってきたうその情報を信じてしまわないように、注意したい。
- ネットの情報、特に自分に都合の良いもの情報はより確認もせずに信じてしまう傾向にあると思うし、実際私もそうだと思う。しかし、見たものを鵜呑みにするのではなく、落ち着いてそれが本当に正しい内容なのかを判断したい。また、いろいろな人の立場から情報を考えることを心がけるようにしたい。
- SNS を利用していてニセ・誤情報に対して耐性がついていると思っていたが慢心してはいけないと思った。
- 意外性あって誰かに伝えたい情報こそ注意して扱いたい。
- 善意からのニセ、誤情報の拡散が一番厄介だと思いました。
- 何が正しいのか自分で見分ける力が必要だ。
- 自分だけは騙されないと思っていたけど、自分の都合の良い情報だけにとらわれないようにすることが大事。

8 おわりに

世の中は情報で溢れかえっていると感じる。情報過多を乗り越えて「情報爆発」と呼ばれる状況かもしれない。誰もが簡単にSNSや動画配信・投稿サイトで情報を発信することができ、誰もが簡単に情報を収集することができる。情報の「速さ」・「インパクト」・「意外性」などが重要視されることもあり、「正義」のもとであれば何もどのように発信してもよいという風潮も感じる。情報の持つ「価値」や「質」や「重み」というものがどれだけ意識されているのかと疑問に思うこともある。日々の情報分野における成長はここ数年本当に早いと感じるし、来年は？5年生たちが社会人になることには？と考えると年々予想がつきにくくなっていくように思う。

授業の中で、人は自らの見たいもの、信じたいものを信じるという心理的特性を持っていると伝えた。認知バイアスと呼ばれる心理現象により、無意識のうちに合理的でない行動や偏った判断をすることがあり、コロナ禍においては様々なニセ・誤情報が日本中に広まったことを話した。「フィルターバブル」はなかなか気づかないこと、ネットニュースやSNSなどには、その人が欲しがりそうな情報を分析し、同じような情報を表示する「アルゴリズム」と呼ばれる機能があること、偏った情報に囲まれていると、世の中の標準を捉えにくくなることなどを話したが、生徒たちは普段の授業以上に真剣に聞いていた様子であった。感じたことや考えたことが多かったからこそ、生徒たちの感想はとても充実したものになっていた。「情報」というものへの捉え方についてよく理解し、ニセ・誤情報に騙されない、ニセ・誤情報を発信しない人になってほしいと思う。情報に惑わされず、自分の考えを持ち、他者の意見に耳を傾け、様々な情報を比較しながら、正しい行動や判断ができるようになることを願いたい。

【参考文献】

- [1] 『メディア情報リテラシー向上施策の現状と課題等に関する調査結果報告』、総務省・みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社デジタルコンサルティング部，2022年
- [2] 『令和5年度情報通信白書』，総務省，2023年